

1 キッチンにおすすめの設備①

●クッキングヒーター

快適で健康的な住まいでは、調理機器もなるべく火を燃やさないことを考えたいものです。火を燃やすことによって発生する二酸化炭素や水蒸気が室内の空気を汚すからです。

望ましいのは電気で調理するクッキングヒーター。特に最近では、IHクッキングヒーター（またはIHヒーター）が注目されています（150ページ参照）。

IHとは電磁誘導加熱（Induction Heating）の略。渦巻状のコイルから発生する磁力線によって、上に置かれた鍋の底に渦電流を生じさせ、鍋自体をヒーターのように加熱するもの。鉄かステンレス製で底が平らな鍋しか使えないことが弱点といえは弱点ですが、十分なパワーがあることと、安全性が高く空気を汚さないことで人気を呼んでいます。高齢者でも安心して使えることも魅力の一つです。

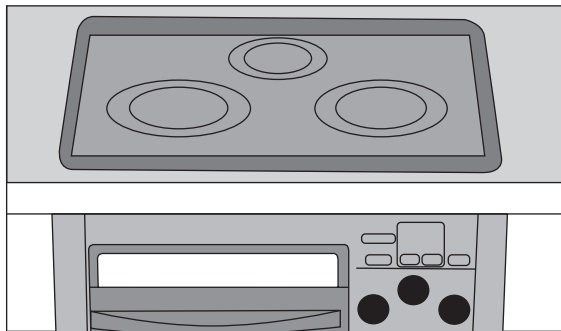
●給気機能付きレンジフード

IHヒーターを採用しても調理する材料から臭いや水蒸気が出るのを防ぐことはできません。レンジフードによってキッチンから外へ臭いや水蒸気が広がらないようにしたいものです。

とくにIHヒーターは、火を燃やさないために調理器まわりで空気の対流が起きません。それが臭いや水蒸気熱などの拡散を防ぐ効果をもたらしてくれるのですが、逆に上昇気流がないために大風量のレンジフードでなければ臭いや水蒸気を捕集しきれないというデメリットにつながっていました。

こうした欠点を補うために、IHヒーター向けに小風量でも効率よく排気できるレンジフードが市場に出はじめています。そうしたレンジフードの多くは、排気と同時に給気を行い、レンジフードまわりで換気を完結する優れた機能を備えています。

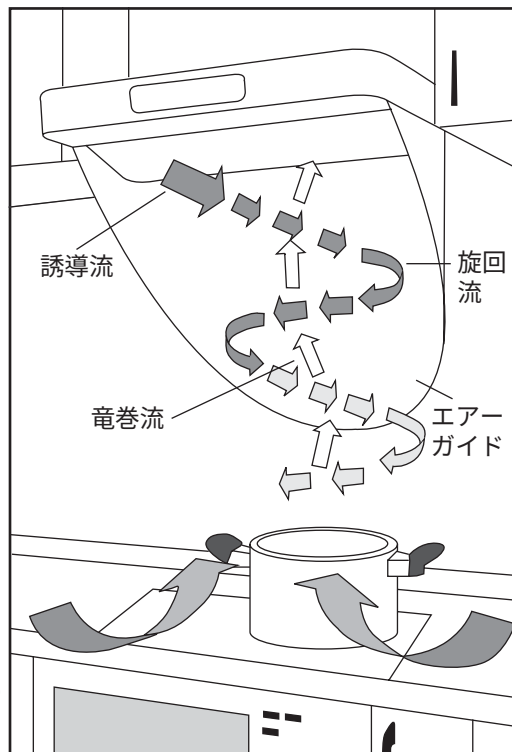
●IHクッキングヒーター



●給気機能付きレンジフード

竜巻捕集方式の原理

レンジフードを運転するとエアガイドに沿って誘導流を吹出し、旋回流をつくると同時に排気により旋回流内を負圧にして竜巻流をつくる。油煙や水蒸気はこの気流とともに吸引され、グリスフィルターを通して屋外へ排出される。



竜巻流となり周辺の空気を伴い上昇する。

（松下電器産業／IHクッキングヒーター専用レンジフード）

2

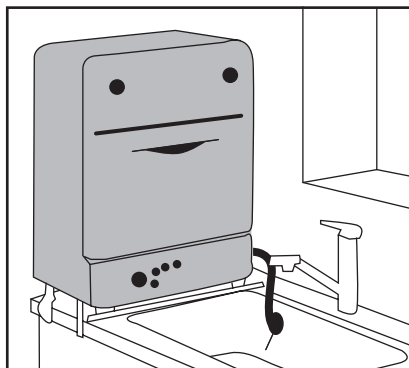
キッチンにおすすめの設備②

●食器洗い乾燥機

このところ卓上型の食器洗い乾燥機が静かなブームとなっています。「食洗機を欲しいが、リフォームして取り付けるには費用がかかり過ぎる」というミセスが卓上型食洗機を購入しているようです。

なんと言っても、大量の食器を一度に全自動で洗えるという食洗機は魅力的。一時はぜいたく品のように見られていた食洗機も、かなり値ごろになってきましたし、洗う機能や省エネ性能も一段と向上しました。洗い方にもよりますが、シンクでお湯を流しながら洗うのに比べ、卓上型食洗機の方が省エネルギーだ、という報告もあるほどです。

卓上型食洗機では、キッチンの作業スペースをせばめてしまうし、洗える食器の量も少な目。新築やリフォームの際には、ビルトインタイプの食洗機の採用を検討してみたいものです。



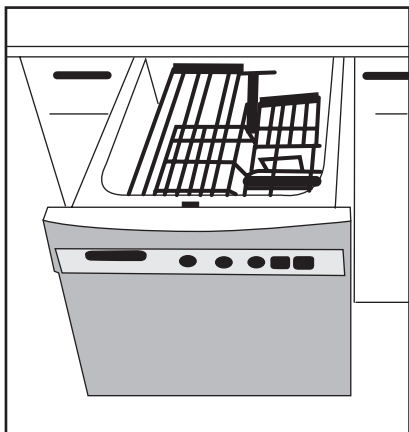
●卓上型食器洗い乾燥機

手軽に設置できるが、キッチンが狭くなることと、食器を洗う量が限られている。

奥行300×幅500×高さ645 (mm)

●ビルトイン型食器洗い乾燥機

すっきり収まり、洗える量も多い。新築やリフォームの際に採用したいもの。

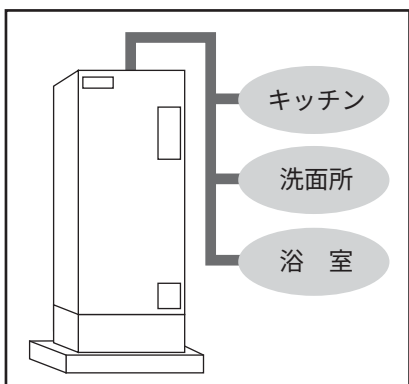


●電気温水器

キッチンではつねにお湯が使われます。給湯設備にも一工夫して省エネと快適性を両立したいところです。その力強い味方が深夜電力を利用する電気温水器です。

電気温水器は、昼間の電気代の約三分の一という割安な深夜電力を使い、夜のうちにたっぷりとお湯を沸かしてタンクに貯めておき、その湯を必要に応じて使うというもの。火を使わないから安全、燃焼音がなく静か、同時に2ヶ所以上でお湯を使う場合も給湯温度や湯量を変化することがないなど、たくさんの方の利点を備えています。

電力供給は、需要のピークとなる日中に合わせて供給設備が用意されています。そのため夜間は電力が余り気味、電気代も安く設定されています。日中に使うお湯を夜間につくっておく電気温水器は、電力使用量の平準化に貢献することでもあるのです。



●電気温水器

深夜電力を利用（夜間に湯を沸かす）するので、料金が割安。また火を使わないので安全。1日の水の使用料を考え、温水器の大きさを決めるとよい。

3 バスルームにおすすめの設備

●安全に配慮した浴槽

最近の住まいづくりではユニットバスが全盛です。確かに浴室全体をそっくりユニット化したユニットバスは、水仕舞いなども良く、使いやすさの点でも申し分ありません。特に最近では、バリアフリー化に考慮して、高齢者でも安全・快適に入浴を楽しめるように工夫が凝らされています。

例えば、床は濡れていても足を滑らさないような加工を施し、四方に排水溝を設けて水はけをよくしています。もちろん、浴槽への出入りのための手すりは必ず付いています。

浴槽への出入りをもっと楽にするため、浴槽の縁を広くしたのも登場しています。いったん縁に腰をかけて、体の向きを変えてから出入りするという工夫です。これなら、体のバランスを崩すこともなく安全性が高まります。

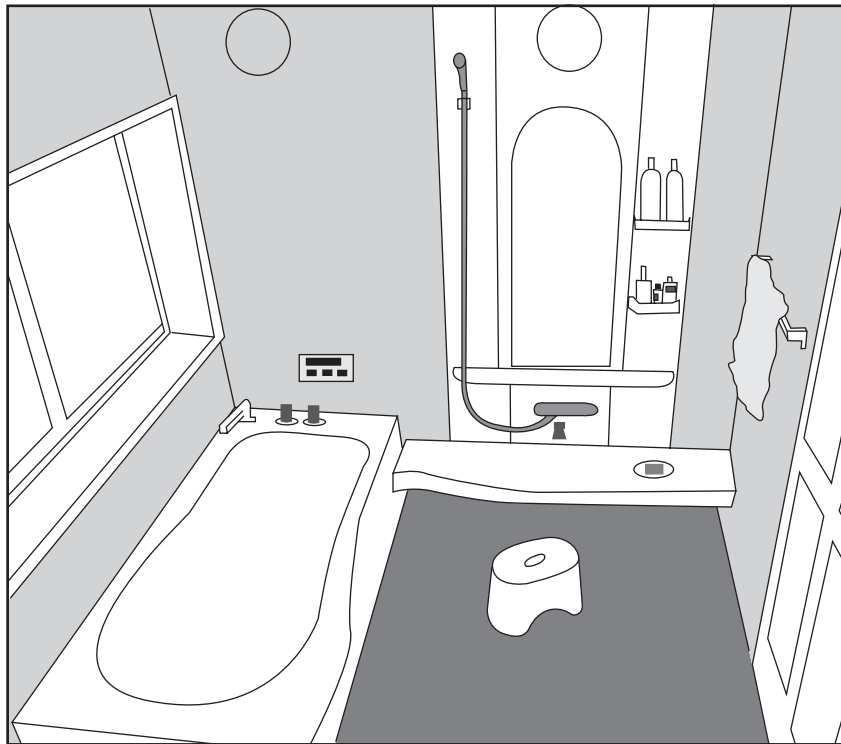
●脱衣室・浴室の暖房

脱衣室や浴室の設備として忘れがちなのが暖房です。「ちょっと寒くても、すぐに暖まるからいい」と考えられているのかもしれませんが、その「ちょっと」がとても危険です。衣服を脱いでいるだけに、体はかなり急激な温度差にさらされるので、高齢者や体の弱い人は、ヒートショックによって体に負担をきたす恐れが十分に考えられます。

やはり、脱衣室・浴室は、きちんと暖房をしておきたいものです。もちろん長時間にわたって暖房をつけている必要があります。脱衣所なら衣服を脱いでいる間、浴室なら浴槽に入ってから体が暖まるまでの間、しっかりと暖めてくればいいのです。

暖房器具としては、立ち上がりやすい電気ヒーターなどが適しています。浴室用については、濡れても安全な専用タイプを選ぶことが大切です。

浴室用設備



安全性にも配慮したユニットバス。浴槽の広い縁が、出入りする際の腰掛けの役目を果たす。

★その他の快適な設備

浴室換気暖房乾燥機 — 乾燥、暖房、換気、涼風の4つの機能を備えたものもある。浴室内にカビが生えにくく、健康的。

浴室の床暖房 — 浴室に入ったときの足元の冷たさを解消でき、浴室内も暖かい。

リモコン付きバス — キッチンのリモコンから浴室の排水、洗浄、開栓、お湯張りまでを自動的に行える。

サウナ — 発汗作用は体の疲労やストレスを解消し、体重の減量効果もある。



トイレにも小ぶりの洗面台と収納が欲しいもの。そのためには2㎡の広さが最低限。できればもっと広さにゆとりが欲しい。

★その他の快適な設備

便座昇降装置付き便器 — 高齢者や足腰の弱い人に便利な便器。エアバックを利用して便座が上下に動くので、容易にトイレを済ませることができる。

3 トイレにおすすめの設備

●まず広さにゆとりを

はるか昔の日本のトイレは、半畳(約0・8㎡)が標準の広さとされてきました。これはまさに用を足すだけの最低限の広さです。もちろん、現代では徐々に広がりつつありますが、快適さを求めれば最低でも2㎡近くは欲しいものです。この程度の広さがあれば、小さな洗面台とトイレまわりの備品を収納する小型のキャビネットを据え付けることができます。

特に高齢になった際のことを考えるのなら、トイレは広めしておくことです。ただし、車椅子でも利用できるようにするとすると、車椅子が入り、そのうえで介助者が動ける程度のゆとりが必要なのです。相応な広さでなければなりません。そこまでは無理としてもできるだけ広めしておく、なにかにつけて便利です。

●ハイテクな便器も

進歩していないようでいて、急速な進歩を遂げているのが便器でしょう。今や新築の住まいでは「暖房・洗浄・乾燥機能付き」の温水洗浄便器が、ほぼ常識となっています。脱臭機能付き、座ると温風が吹き出す暖房機能付きなどなど、いろいろな機能が付くようになってきました。洗浄機能に馴れない方もまだまだ多いようですが、実際に自宅に取り付けて、はじめてその快適さが分かるもの。温水で洗浄する清潔感、あるいは心地よさは経験してみないと理解できないでしょう。

便器のほかに設備として加えたいのは暖房でしょう。トイレもヒートショックを起こしやすい場所だけに暖かくしておきたいもの。狭いスペースを短時間だけ暖めるのですから、立ち上がりやすい温風式の電気ヒーターなどが適しています。専用タイプが用意されていますので、トイレに合わせて選ぶといいでしょう。